

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
139	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
<b>題名（原題／訳）</b>	
Predicting alcohol consumption in adolescence from alcohol-specific and general externalizing genetic risk factors, key environmental exposures and their interaction. 思春期におけるアルコール摂取の予測： アルコール特異的または一般的な遺伝的危険要因、主要環境曝露要因、およびそれらの交互作用から	
<b>執筆者</b>	
Kendler KS, Gardner C, Dick DM.	
<b>掲載誌（番号又は発行年月日）</b>	
Psychol Med. 2011 Jul;41(7):1507-16.	
<b>キーワード</b>	
思春期、飲酒、遺伝、遺伝環境交互作用	
<b>要旨</b>	
<p><b>背景：</b> アルコール摂取は、アルコール摂取障害（AUDs）に関連する特定の遺伝的危険要因、外在化行動に関連する非特異的な遺伝的危険要因、および様々な環境要因に影響されている。しかしながら、これらのリスク要因相互の影響に関する知識は限られている。</p> <p><b>方法：</b> 成人男性双子 1796 人における、鍵となる環境曝露およびアルコール摂取に関する、思春期から中年期にかけての生活史調査を用いたレトロスペクティブ研究である。解析は線形混合モデルにより実施した。</p> <p><b>結果：</b> 最大アルコール摂取量に対する非特異的遺伝的危険要因の影響は、思春期前半から後半にかけて急速に増大し、年齢 15～17 歳でピークに達し、その後徐々に減少した。アルコール特異的遺伝的危険要因の影響は、成人期半ばを通じて徐々に増加した。アルコール摂取に関する遺伝的要因の影響は、思春期早期から半ばにかけて、それ以降の期間に比べ、より顕著に環境により修飾されるという確固たる根拠が示された。アルコールの入手しやすさ、仲間の逸脱行動、低い向社会的行動による修飾効果が最も強かった。環境リスク要因との交互作用は、AUDs 特定の遺伝的リスクに比べ、非特異的外在化障害のリスクに対してより顕著に見られた。</p> <p><b>結論：</b> アルコール摂取に対する特異的・非特異的遺伝的要因の影響は、成育過程において異なることが示された。アルコール摂取に対する遺伝的影響は、社会的制約（例えば、向社会的行動や親の監視など）が最小化されている場合や、アルコールへのアクセスが容易であったりその使用が奨励されるような環境下にあるとき（例えば、アルコールが入手しやすかったり、仲間の逸脱行動がある場合）に、より顕著であった。アルコールの摂取量には遺伝・環境要因の交互作用が影響していた。若年期の飲酒パターンが決まっていく過程の初期において、遺伝的要因の影響には大きな可塑性があることが示された。</p>	